

持続的な野生動物管理に向けて

文 梶 光一 東京農工大学 / 「野生生物と社会」学会 理事



急激な人口減少の時代を迎え、シカ・イノシシは分布を拡大し生息数を増加させ、獣害問題が深刻化している。国はシカ・イノシシの生息数を10年で半減させる宣言を出して4年目を迎えた。捕獲を積極的に進めるために、法律が鳥獣保護法から鳥獣保護管理法へと改正され、従来の狩猟や駆除に加えて新しい捕獲体制で臨むことが可能となった。また、政府は野生鳥獣肉（ジビエ）の利用拡大を推進し、保護から利用を含めた管理へと大きな政策転換が行われた。

このようなおりに野生動物管理全国協議会によって「野生動物管理の体制と資源的利用のあり方を考える」という時宜を得たシンポジウムが開催された（6月4日、東京大学弥生講堂）。会場は若者を中心にほぼ満杯となり、若者の関心の高さがうかがわれた。講演では、狩猟者と専門的捕獲者の役割分担の在り方、被害管理と資源利用の在り方について、現場からの豊富な経験に基づく質の高い発表が行われた。昨今の捕獲数の水増しによる報奨金搾取や国が旗ふるジビエ振興の情報が蔓延するなかで、野生動物管理は何のために、誰のために、誰が実施するのかを改めて考える良い機会となった。そして持続的な野生動物管理を実現するには、大学教育における野生動物管理プログラムが必要だとの思いがますます強くなった。野生動物管理の人材は一朝一夕では育たない。教育こそは最大の武器であることを肝に銘じておく必要がある。



大学1年生向けの獣害実習におけるシカの解体見学